

水木しげる氏

表紙絵

＝やっぱり風呂はええのお＝

表紙絵：水木しげる

- | | | |
|-----------------|-------|-----|
| ・ 特集：私のすすめるこの一冊 | | 2～6 |
| ・ 絵本の読み聞かせ講座 | | 7 |
| ・ 郷土の歴史と伝承 | | 8 |

※音声版、マルチメディアDAISY版もあります。ご希望の方は図書館へお問合せください。

私のすすめる

この一冊

皆さんからお寄せいただいた「私のすすめるこの一冊」です
今年はどんな本と出会えるでしょうか

ノースウッズ ー生命を与える大地ー

大竹英洋著 クレヴィス

推薦者：木下敦子

2021年の土門拳賞受賞の写真集。

タイトルのノースウッズとは、北米大陸の北緯45度から60度に位置する自然保護区で、原生林と1,000以上の湖がある。

文字通りの手つかずの自然の中で、淡々と与えられた命を生きている動物や植物、空や雲や水の姿を見事に捕えた写真が約200頁に収められている。

頁を繰っていると「これこそ生命の真の姿なんだ」と深い感動を覚える。と同時に、人間の飽くなき欲望で取り返しのつかない程に汚してしまった地球への罪悪感も。

これだけの撮影に必要なものは、忍耐と情熱だと序文にあるが、まさに大竹氏の静かな情熱が写真から伝わってくる。

湖水地帯の移動は主にカヌーだが、水上移動が困難な場所では重いカヌーを背負って歩き、絶好のチャンスを待つために何日もテント生活をしたり。忍耐の一語。

自然への愛と畏敬を熱く伝える一冊。

水を縫う

寺地はるな著 集英社

推薦者：熊谷理恵

手芸好きな男子高校生の清澄。過去のトラウマで可愛いものが苦手になった結婚予定の姉のために、祖母と共にウェディングドレスを完成させるまでの家族の成長ストーリー。

自由すぎて離婚したデザイナーの父親、手間をかけることだけが愛情かと憤慨しながら働き続ける母親も描かれ、ダイバーシティ（多様性）という今の時代を反映した内容ですが、家族や身近な人との関わり合いのなかで自分はどうあるべきか、大事な人たちとどう向き合っていけばいいのかという普遍的なことを深く考えさせられ、心に残る良作です。各章ごとに姉弟、母親、祖母と視点が変わっていくので、読者も誰かの立場や心情に共感しやすい構成になっています。そして、「水を縫う」というタイトルの意味が最後に明らかになるのも印象深いです。このような本を課題図書（2021年度）として読める今の高校生がとても羨ましい。多くの世代に手にとって読んでみてほしい素敵な本です。

夜想曲集 ー音楽と夕暮れをめぐる五つの物語ー

カズオ・イシグロ著 土屋政雄訳 早川書房

推薦者：荒木明子

あまり多作ではないカズオ・イシグロの短編集です。サブタイトルに「音楽と夕暮れをめぐる五つの物語」とありますが、時間の夕暮れではなく、人生の夕暮れにさしかかった人の、もう戻る事のない日々を思う話です。「老歌手」で、ギター弾きは何を思って役を引き受けたのか。「チェリスト」では、女性の演奏はどんなのだろうか。物語とは別に、それぞれの登場人物の人生を勝手に想像してしまうような描写です。読後才能とは？成功とは？一時は手にすることができても永遠ではない。ほろ苦い月日だったけど、それぞれ穏やかに受け入れている。物語で流れる BGM が心地良く、改めて音楽だけ聞きたくなるのも大きな特徴だと思います。最近の日本で、この様な作品はあまりないと思います。①海外作品が苦手な、②大人の、③読書好きな大人にぜひ手に取ってほしい一冊だと思います。ホロっとして少し苦笑いをしてしまうと思います。



スウェーデン館の謎

有栖川有栖著 講談社

推薦者：上江智希

雪の降る夜、一人の女性が殺害された――。

場所は福島・裏磐梯。ミステリ作家有栖川有栖は取材旅行に訪れていた。泊まったペンションのオーナー一家や隣家の人々とも親しくなる。彼は二泊三日の楽しい旅を終え、この地を後にする筈だった。夜中、一人の女性が殺される。現場は周囲が雪に包まれた離れの一室。犯人の足跡はない。臨床犯罪学者・火村助教授が到着するも、折れた煙突に半開きの扉、謎の証拠を前に捜査は平行線を辿る。そんな中、もう一人、女性が離れで襲われる。二人の女性に訪れた恐ろしい惨劇、その真相に火村が遂に辿り着く。愛と哀しみに満ちた殺人事件。その真相とは――!!

有栖川有栖の大人気国名シリーズ第二弾。火村と有栖が磐梯山を背に、謎の殺人事件に挑む。あなたは愛する人を守る為に、罪を犯しますか――？



ザリガニの鳴くところ

ディーリア・オーエンズ著 友廣純訳 早川書房

推薦者：秋葉暢子

ミステリー要素の強い作品である。大概は一人の男の死の謎を解いていくことである。アメリカの湿地帯に暮らす6歳で家族に捨てられ、取り残された主人公カイヤの孤独と孤独の恐怖の中で生きていく様子がよく描かれている。湿地という自然を舞台とした風景とそこに生息する動物たちとの交流が、成長していく彼女を大きく包み込んでいるさまが鮮明である。偏見や差別のあった時代なのか、少女が一人で生活するというあまりにも現実離れしている内容ではあるが、孤独であるが故に自分自身だけを頼りにし、自分の道を行く凜とした美しさがある一方、成長するにつれ周りの助けややさしさに触れていき、人恋しい気持ちも芽生えてくるような心の葛藤の描写も素晴らしい。また湿地と孤独感の相乗効果は、一層もの悲しい気持ちにさせる。すっきりした気持ちになるというよりは、いつまでも湿地から抜け出せないような感覚になる作品である。



田舎教師

田山花袋著 新潮社

推薦者：佐々木功

四里の道は長かった。その間に青皐の市の立つ羽生の町があった。田圃にはげんげが咲き、豪家の垣からは八重桜が散りこぼれた。赤い蹴出を出した田舎の姐さんがおりおり通った。に始まり、ある秋の日、和尚さんは、廂髪に結って、矢絰の紬に海老茶の袴を穿いた女学生風の娘が、野菊や山菊など一束にしたのを持って、寺の庫裏に手桶を借りに来て、手ずから前の水草の茂った井戸で水を汲んで、林さんの墓の所在を聞いて、その前で人目も忘れて久しく泣いていたことを上さんから聞いた。何度読んでも鳥肌が立ちます。6歳で父を失って困苦の少年時代の作者だからこそ、若くして夢を人生とする事なく死んだ文学青年を理解し作品に出来たのでしょう。私は東武鉄道（単線）で丸一日中羽生市内を歩き回り市民の方とも話し合っって涙ぐみました。又、足袋作りの行田や館林なども回って花袋の自然主義文学の有り様も見学したのです。本文を記したのも感激の有り難みからです。

一九八四年

ジョージ・オーウェル著 高橋和久訳 早川書房

推薦者：松橋拓

ディストピア小説の古典にして最高傑作。ザミャーチンの『われら』やハクスリーの『すばらしい新世界』もディストピア小説の名著の呼び声が高いですが、『一九八四年』がそれらの作品と一線を画するのは、全体主義の「手段」ではなく、「理由」を問うている点です。この作品が紹介されるときには、しばしば「監視社会」というものに焦点が向かいがちですが、私はこの「理由」こそが、この作品の価値を高めているのではと思っています。著者のオーウェルがスペイン内戦で感じた権力の欺瞞性や、英国統治下インドでの官吏生活の自己相克、パリ・ロンドンでの放浪生活で感じた街場で生きる人々の活力などがこの作品で描かれており、残念ながら遺作となった今作こそ、オーウェルの最高傑作と言えます。個人の内面の自由や、客観的な真実というものが脅かされる現代でこそ説得力を持つ作品、ぜひ読んでみてください。

博覧男爵

志川節子作 祥伝社

推薦者：長尾敏博

調べ物をしていると意外な人物に出会うことがある。博物学の大家と言われる田中芳男（1838～1916）もその一人だった。彼の名を世間に知らしめているのが『摺拾帖』（くんしゅうじょう）と名付けられた一連の切り抜き帳の存在だろう。これは彼が身近にあった包装紙、広告紙等手当たり次第に収集し貼り付け、百冊程あるという。今では貴重な文化遺産となり、東大の総合図書館で電子化された画像が、閲覧可能だ。つい最近評伝が出た。医家に生まれた彼が、家業よりも本草学を志向する所から始まり、幕府の開成所に勤め、より実用的な物産学を研究するようになる。パリ万博に出展するため「虫捕り御用」と称し、武蔵の国を駆け巡り昆虫を集め標本を作った話は楽しい。彼の業績の中でも一番は上野の博物館の設立に関わったことだろう。西洋文明の先進性に触れ、それを日本にも取り入れようと苦闘する人達が描かれている。田中芳男の入門書としてもちょうどよいのでは。

日本と世界の塩の図鑑 ー日本と世界の塩 245 種類の効果的な使いわけ方、食材との組み合わせ方ー

青山志穂著 あさ出版

推薦者：上江結弥

みなさん、塩はどれも同じような味や形だと思いませんか。いえいえ、とんでもない。ただ一口に塩といっても、海水塩や岩塩といった、とれる場所による違いや、塩の粒の形状やしょっぱさなどによって千差万別です。

この本では、塩の精製方法から、国内、国外の塩の種類、さらには塩を用いた料理に至るまで、塩を多方面から解説。さらに、塩にとことんこだわるシェフなどの寄稿文も掲載され、本の内容を盛り上げています。

塩に魅了され、塩を研究し尽くした著者が送るこの一冊、読めばあなたも、日々用いる塩に興味を持つこと間違いなしです。



浮浪児 1945 ー戦争が生んだ子供たちー

石井光太著 新潮社

推薦者：箕深田一

私には子供がいない。生まれて来た子供の将来は想像でしかない。今の人たちには、第二次世界大戦というより、東日本大震災の死者の方が身近だろう。毎年、子供たちの写真やビデオが流れる。子供たちの将来が絶たれた瞬間だ。今でも自然災害や戦争、テロ等で亡くなる子供たちは多い。その一人一人の子供が生きていれば、世界の現状は変わっていたのかもしれない。

私は戦後十数年後に生まれた。それなりに苦労もしてきたつもりだ。しかし、同じ戦後生まれでも、直後、一年二年、三年五年と復興による生活、考え、希望等随分違うと感じた。良きも悪きも生き抜いて来た人たちを理解しようと手にした本がこの一冊である。

いろいろと書いてきたが、理屈などいらない。想像するのも困難なので、理解など到底できないからだ。でも、誰に知られることなく死んでいった名もない子供たちの魂の叫びが聞こえたような気がした。

いのちの停車場

南杏子著 幻冬舎

推薦者：銅谷孝子

文庫本で四百頁に満たないこの本から得られる医療に関する斬新な情報と知識は、すばらしいの一語に尽きます。医師である著者はわかりやすい文章で、誰もが持っている「病気への不安や恐怖」をやわらげるために小説の形で案内する医療小説の名手のようです。

著者は女子大政科出身で出版界で編集者を経て出産してから医師資格を取り、病院で多くの患者を診て高齢者医療関連の著書を三冊出版して話題となり、これが四冊目です。

一章は老老介護、二章は幹細胞移植技術、三章はゴミ屋敷の母と娘、四章は最終期の患者と妻、五章は小児ガン、六章は医師自身の父の安楽死の願い、この章は老令の私にとって一番心惹かる内容なので、何度も読み返しました。

医療関係には全く素人の私が内容について間違っって紹介した点があったら困ると不安がありますので、ご自身それぞれにお読み頂ければお勧めした甲斐がありうれしい極みです。

陸奥爆沈

吉村昭著 新潮社

推薦者：青山裕昭

かつて訪れた「大和ミュージアム」には、戦艦大和の偉容とともに、「人間魚雷」回天の展示コーナーがあった。太平洋戦争で特攻といえば「神風」、戦艦なら大和、武蔵がよく知られているが、穏やかな瀬戸内海にたった数分で爆沈した戦艦陸奥の謎に迫ったのが本書である。

吉村昭は「戦艦武蔵」で米機動部隊の集中攻撃を受け、フィリピン沖に力尽きる武蔵を活写しているが、停泊中に沈んだ陸奥にも、「人間たちのドラマ」がうごめいているという。スパイによる謀略説、弾薬の自然発火説などが語られ、作者はついに帝国海軍の「黒歴史」に行きつく。それは日本海海戦でバルチック艦隊を屠った三笠が、乗組員の不幸事で爆沈していた…という「坂の上の雲」ファンまっ青の事実から始まる。

終盤で武蔵と陸奥の慰霊祭の「空気」の違いに言及があり、殉職（戦死にあらず）した陸奥艦長夫人の清静なたたずまいに救われる。

ぼくモグラキツネ馬

チャーリー・マッケジー著 川村元気訳 飛鳥新社

推薦者：小塚恵子

男の子とモグラ、キツネ、馬が出会い、「ぼく」が悩んでいることをみんなに話しながら旅をする。そんなお話です。絵本と侮ることなかれ！「自由って？」「幸せって？」「やさしさって？」…この本を読み終わると、肩の力が抜けて、心が軽くなると思います。

コロナ禍でストレスがたまり疲れている方は、一度読んでみてください。



あらしの前

ドラ・ド・ヨング作 吉野源三郎訳 岩波書店

推薦者：井上暁子

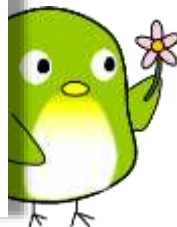
オランダのある田舎町。フォン・オルト家に6人目の新しい命が誕生するところから物語は始まります。学校でのクラスメートとのやり取りがあったり、成績に悩んだり、クリスマスの準備に心を躍らせたり、夜中に往診を頼まれる父親の働きぶりだったり…実直な家族のそれぞれの日常が綴られていきます。時は第二次世界対戦直前。アムステルダムで学ぶ長女の危機感は家族の暮らす田舎町にはなかなか伝わっていません。しかし、首都から離れたこの街にも不穏な空気が次第に流れ込んでいくのです。それはドイツから逃げだしてきたユダヤ人の少年が家族と共に暮らすことに象徴されるように、そしてまた、安心できるその家での暮らしも安心できる場所でなくなってしまう冷酷さを否応なく感じさせられます。物語はこの町の上空にも爆撃機が現れ、ロッテルダム爆撃を受け、ついにドイツに占領されるところで終わります。その後の物語は『あらしのあと』に続きます。

さよならエルマおばあさん 大塚敦子写真・文 小学館

推薦者：上江聡子

85歳のエルマおばあさんを、まもなく死を迎えることがわかってから旅立つまでの1年間、モノクロ写真で追い、飼い猫スターキティの視点で語る本です。「死」というテーマを子どもに伝える本は他にもありますが、この本ほど親しい人の死を正面からとらえ、簡潔にまとめているものはないと思います。

お別れの手紙を書き、親族や友人の最後の訪問を受け、悪化する症状に合わせて生活が変わる様子は、「旅立ちの準備」の姿をリアルに描いています。同時に、「魂が、この体をでて、こことは別の世界に行くだけ」「いまがいちばん幸せ」と穏やかな顔で語るエルマおばあさんの言葉からは、地に足をつけて85年を生きてきたその人生の重み、最後までしっかりと意志を持ち続ける強い心を感じます。著者との信頼関係があったからこそ、このように高い完成度を持った作品が生まれたのでしょうか。気持ちを込めつつも冷静にレンズを覗き続けた著者にも敬服する一冊です。



赤毛のアン

モンゴメリ著 村岡花子訳 新潮社

推薦者：新海智子

赤毛のアンは、本の中で11歳で登場し、16歳になる頃までが描かれています。プリンスエドワード島でのアン在生活や島の自然をとっても想像できる本となっています。子供の頃、赤毛のアンを読んで、アンのような発想、明るい性格、アンがコンプレックスだと思っていた赤毛に憧れていました。大人になってもう一度読んでみたいと思い、手に取ってみると、社会経験や子育てを経験して読んだ赤毛のアンは子供の頃とは違うものが見えてきました。アンは成長はもちろん、作者モンゴメリの経験がちりばめられていたこと、アンが孤児院から老兄妹に引き取られ愛情を込めて育てられることで自分らしく生き、コンプレックスも克服していくこと、そしてアンを引き取った老兄妹も子育てをしていく中でアンと一緒に成長していくことなど、自分が歳を経て子供の頃には見えなかったものが見えてくるということを教えてくれた1冊でした。子供も大人も楽しめる本です。

はてしない物語

ミヒャエル・エンデ作 上田真而子訳 佐藤真理子訳 岩波書店

推薦者：上江明穂

はてしないものがたりは、バスチアンとアトレーユたちのものがたりです。

まず、バスチアンのせつめいをします。

バスチアンは、本当にはてしないものがたりを読んだ、少年です。

本の中に自分が出てきて、女王幼ごころの君によべれますが、自分のすがたにじしんをもてず、これませんが、とうとうきてじぶんのすがたをかえて、アトレーユとぼうけんをします。

次にアトレーユのせつめいをします。

バスチアンが本を読みはじめたときの主人公です。

バスチアンがくるまえから、色々なぼうけんをしてきた少年です。

アトレーユは、みどりのはだぞくです。

さいわいのりゅうとぼうけんをして、色々おもしろいことがあります。

この本を読んだら、終わりませんよ！



たくさんのご応募ありがとうございました。
お寄せいただいた原稿は、掲載の都合により一部編集させていただきました。
掲載は順不同になっております。ご了承ください。



絵本の読み聞かせ講座を行いました

調布市立図書館では、年に1回、子どもへの読み聞かせに関心のある方を対象に連続講座を開催しています。令和3年度は、10月7日、14日（木）に行いました。

ご家庭で読み聞かせを経験されている方も、読み聞かせは初めてという方も、熱心に受講されていました。

1日目は、「なぜ読み聞かせが大事なのか」といった講義や、絵本の持ち方やページのめくり方の実践などを行いました。2日目は、どんな絵本が読み聞かせにおすすめなのか、実演を交えながらたくさんの絵本をご紹介します。



▲講義の様子

絵本の紹介を交えながら、読み聞かせのコツをお話ししました。実際に講師の読み聞かせを聞く時間もありました。



▲絵本の持ち方

講師の見本に合わせ、絵本の持ち方、ページのめくり方を実践しました。実践中は講師らが参加者の席を回り、疑問に答えました。

○参加者の声（事後アンケートから抜粋）

- ・読み聞かせに適した本の選び方について、大変良くわかりました。実際に手に取って読んでみたいと思う本がたくさんありました。高学年の子にも読み聞かせは大切であり、その時間は本の世界に浸ってほしいという考えがよくわかりました。
- ・年齢幅が広いお話会の場合には、下の子に合わせて読み聞かせをするということが参考になりました。まだ年齢幅のあるお話会はやったことがないので、機会があればそのようにプログラムを組みます。
- ・本の読み聞かせ以外にわらべうたをいれることでメリハリになることもわかった。文章量ではなく、おはなしの内容で対象年齢にあった内容を選べばいいことがわかった。

来年度も開催予定です。読み聞かせや絵本に興味のある方はぜひご参加ください！

毎年、秋祭りの季節になると、調布各地区のお宮のあたりから賑やかな太鼓や笛の音が聞こえてきます。現在、市内の祭りや行事で行われる「獅子舞」と「祭囃子」は、地元の人々により、100年以上の伝統を守って伝えられてきました。これらの郷土芸能は、かつて自然を相手にしていた農村生活において、どのような意味をもっていたのでしょうか。

1. 神祭りと芸能

農村の生産技術があまり進歩していなかったころには、作物の生育の妨げになる天候不順が生じたり、疫病が流行ったりすれば、すぐにくらしが成り立たなくなりました。

そして、このような災いは、雷神となった菅原道真のような、憤死した貴人などの強力な靈魂の怒りによるものと考えられていました。そこで、神を神輿で担ぎ、笛、太鼓などで囃したてる芸能で、神を喜ばせながら村中をまわり、村の外に送り出せば、疫病が防げ、作物も順調に実るということで、祭りが行われるようになりました。

2. 祭囃子の由来

調布の各地区の祭りで演じられる祭囃子は、祇園囃子（京都祇園祭のお囃子）の影響をうけ、江戸の里神楽（民間の神楽で、神を迎え、祈りや酒盛りをして神送りをする儀式）の曲を取り入れて調布に伝わったものです。市内のお囃子の団体には、「寿獅子」といって、新春の祝いに、家々をまわって獅子舞をするところがあります。これも飢饉や疫病流行の時に、猛獣などをかたどった獅子頭のもつ力で村中をお祓いして、災いの神を追い出した「神送り」にちなむものでした。



旧金子村の厄除け獅子

3. 下石原の獅子舞

下石原地区には、元禄の由緒を伝える「三匹獅子舞」が伝承されています。この獅子舞は、周辺地域に烈しい疫病が流行した際に、村に病気が入りそうになったので、村人は獅子を出し、村の隅々まで舞ってお祓いをしました。

さらに、鎮守八幡神社の庭では、水田にみたてた土俵のなかで、稲作に欠かせない水にちなむ唄を唄い、獅子が腰をおとして田植えの仕草をします。そして、刀で四方を切り込み、地面を踏む舞いで、日照りなどをもたらす土にこもる悪霊を鎮めました。

「三匹獅子舞」は、疫病や天候不順の生じやすい夏に行われる場合が多かったのですが、神の喜ぶことは人も喜ぶということで、華やかで賑やかな芸能が秋祭りにも取り入れられるようになったと考えられています。

神祭りを盛り上げるのに必要な芸能を真剣に行うことは、不時の災いをあらかじめ除く手立てといえるでしょう。祭囃子も、戦後まで、不景気になるたびに盛んになり、寒稽古にも熱が入ったといわれるほどでしたが、農業の衰退とともに後継者不足が生じてきました。しかし、先人から郷土に伝えられ、人々の気持ちを豊かにさせるこれらの芸能は、今日では地域のくらしの歩みを語る得難いものとなっています。

参考文献：下石原八幡神社奉賛会『獅子解説』（昭和43年）

刊行物番号

2021-154

図書館だより 第261号

令和 3年12月24日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>